
巻 頭 言

研究成果を実践に生かす

通勤で東京駅を利用している。昨年の夏だっただろうか。キャリーバッグをできるだけ身体に近づけるようアナウンスが何度もあった。事故があったのだろう。最近では、若者から高齢者まで、ときに幼児までキャリーバッグを引いている。確かに荷物を抱えるよりははるかに楽であり、バッグに隙間があれば「これもとりあえず入れておこう」となる。年代を超えた便利な道具の一つである。ただ、このバッグの扱いもコツがあることは持ち慣れたビジネスパーソンたちを見ていて気づく。自分とバッグとの距離、エスカレーターでのバッグの位置など周囲が不快にならない秘訣があるようだ。

同じ頃、同じ東京駅でエスカレーターでは歩かないようにと駅職員が呼びかけている場に遭遇した。片側をあける必要はないとエスカレーター前で誘導していた。安全基準ではステップ上に立ち止まって利用することになっているのだとか。日本エレベーター協会のwebサイトには安全利用アニメがあり、エスカレーターを駆け下りる男性が高齢の女性にぶつかり、その女性が転倒するというシーンが描かれていた。暗黙の了解のようなエスカレーターの関東の右あけ、関西の左あけが今になって「安全基準では…」と注意が促される。医療施設で苦慮している高齢者の転倒事故と同じだと思った。「都市部の高齢化」。「配慮しましょう」レベルではもう対処できない、社会全体のルールが変わろうとしている。しかし、この方法が良いとわかっても、生活スタイルを変えることは容易なことではない。生活の快適さは理屈ではないのだ。

そんな観察をしながら、看護研究と実践についてほんやり考えた。「高齢者の視覚に合わせたパンフレットを作成したら喜ばれ、手術の理解も深まった」という患者がいる一方で、「書類の分量が多くなって面倒」とかえって読まない患者もいるだろう。「AとBの看護を比較研究したら、AにCという効果が出てBには何も生じなかった。では、明日から、Cの効果が必要な患者さんにはA看護をしよう。」と研究成果をすぐに取り入れ、業務の流れも容易に変更する職場を私はまだ知らない。多くの場合、「でもね…」とありとあらゆるケースが登場し「安全が約束できない」と研究成果の実践への活用を却下されることのほうが経験上多かったかもしれない。いのちを預かる責任の重さなのだと思うのだが、意識せずとも動ける状況に変更が生じることへの負担があるのも事実だろう。

現場に活用されることを望んでいる看護研究がたくさんある。研究者は現場の状況を十分踏まえてその活用方法を提案しなければならない。そして、現場も「変化」を恐れず、疎まず「何かおもしろいことはないか」と研究に歩み寄ってほしいと切に願う。本学会誌は研究者のための雑誌ではなく、歩み寄りの雑誌なのである。

今日も東京駅のエスカレーターの片側はあいた状態であった。常識となった行動を変えるためにどんな方法でどのぐらいの時間がかかるのか。日々、観察中である。

平成 26 年 3 月 吉日

東邦看護学会理事長
横 井 郁 子
(高齢者看護学研究室)
